

様式(細則 5-2)

令和6年10月21日

浜田市議会議長 様

議員名 笹 田 卓

調 査 研 究 活 動 報 告 書

下記のとおり調査研究のため視察を行ったので報告します。

記

1. 視察先

- ・東日本製鉄所君津地区
本館 千葉県木更津市築地1番1
- ・公共R不動産 東京都豊島区南池袋2丁目21-1
- ・まちの保育園 東京都練馬区小竹町2-40-4 2階

2. 視察事項

- ・ブルーカーボンの取組について
- ・遊休化した公共空間の活用について
- ・子どもの主体性を活かした保育と地域との連携について

3. 視察の目的（市政との関連など）

- ・当会派の年間テーマに係る調査研究のため
[DX推進、遊休施設利活用、環境対策、保育・幼児教育施策]

4. 期間（移動日を含む）

令和6年10月8日（火） ～ 令和6年10月10日（木）

5. 経費

57,773 円

（経費内訳 視察費 10,420 円、旅費 26,653 円、宿泊費 20,700 円）

6. 視察のポイント・議員活動や市政への反映など

会派として浜田市に政策提言をする。

- DXについて ■公共空間について ■ブルーカーボンについて
- 保育について

7. 視察内容

（詳細は別紙のとおり）



【視察内容】

2024. 10. 09 君津市・日本製鉄

(1) 環境への配慮

- ・水の再利用 90%
- ・ガス再利用 100%
- ・自家発電率 85%
- ・出すと再利用率 100%
- ・スラグの理財化
- ・自治体が回収したプラスチックリサイクル率 100% など



(2) 鉄鋼スラグの活用

- ・鉄を作る時に生成する産業副産物。
- ・製鋼スラグの活用先が減ってきたことをきっかけに利活用方法を検討してきた。→ 藻場づくりなどにも。
- ・ビバリーユニット：藻場造成用施肥材 → 磯焼け海域の拡大に対する対策に活用。
- ・沿岸域の Fe 減少という仮説（元北大松永教授）。に基づくカルシア改質土と人工石材の投与。
- ・君津地区では 2011 年から取り組み（埋め立て時にできた窪地を埋めた）。
- ・浅場・干潟造成の基板材への活用。
- ・全国の浚渫土をターゲットに商品開発。

Q. カルシア改質土の製造料と活用料のバランスは？

A. 現在は 100%活用 浚渫土料に合わせて製造している。

Q. 効果はどうか？

A. ワカメやメカブの繁殖が見られた。ナマコも生殖確認。

Q. 認定申請は誰が行ったのか？

A. 日本製鉄の専門家チームで対応した。

Q. 実績は？

A. 12.6t が認定されたクレジット量。3～10 万円と聞いているが単価は変動している。上昇傾向。

Q. 他地域からのオファーは？

A. 本社に GX 部門があり対応している。

Q. 君津市のカーボンニュートラルの取り組みの連携は？

A. JF、市、日本製鉄で覚書をかわしブルークレジットを申請。JF は藻場の維持管理、市は資産管理、日本製鉄：調査・申請・現地対応という役割分担。

Q. 事業予算は？

A. 協働研究にかかる費用はそれぞれで負担。ブルーカーボンに関する予算はない。

Q. ブルーカーボンに関する取り組みは？

A. 出前授業なども行っている。



【所感】

ブルーカーボンの取り組みを浜田市で取り入れるためには、君津市の日本製鉄のような環境問題の意識の高い大企業、海を活用する団体、そして浜田市がスクラムを組む必要があると強く感じた。

浜田市には環境問題の多くに取り組んでおられる中国電力三隅火力発電所があり、浜田市との連携も可能ではないか。

海を活用する団体は JF 島根や港湾を活用する企業とも協議する必要がある。

浜田市は令和 4 年 9 月に「浜田市 2050 年ゼロカーボンシティ表明を行っており、今後、浜田の海でブルーカーボンの取り組めるよう活動していく。

2024. 10. 09 IKEBUKURO LIVING LOOP (公共 R 不動産)

(IKEBUKURO LIVING LOOP)

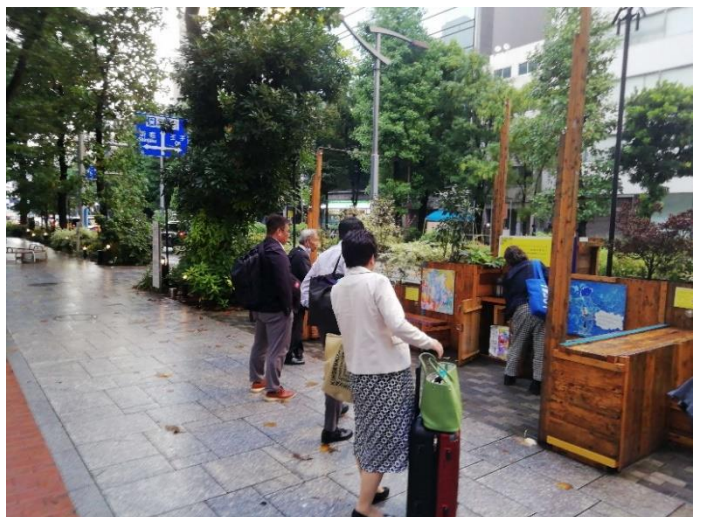
- ・街の賑わいと接続できていないという課題があった。
- ・豊島区もお金がなかったの
で、地域課題と合わせて工夫した（東電の変電所を地下に誘致して家賃をもらっている）。
- ・家族づれやこども連れの利用が多い（目的を持たずとも寛ぐ場所）。
- ・街のイメージが変わったきっかけとなった（一つの場所が変わることで、エリアにも影響を与えている。地価も上昇）。
- ・グリーン大通りの活用を国家戦略特区としてテコ入れのタイミングでもあった。
- ・場所単体で考えてもだめ。
- ・緊張しない過ごし方を道路や街中でも実現できるようなまちづくりを目指す事業を開始。
- ・使う人が誰か、その人がどう使うのかを整理して、必要な整備をするプロセスを大事にしている。
- ・社会実験として取り組み、大きな投資はしない。そのプロセスの中で見えてくることを次の整備に反映させている（ベンチの設置、雰囲気の良い照明、イベントしやすい給排水・電源、植栽リニューアルなど）。



- ・居心地の良い空間づくり。
- ・出店の売り上げの推移、購買客数、滞在時間、行動パターン（スマホを見ている、会話をしているなど）などのデータを取得。
- ・ウォークアブルが大きな流れ → 常設化に向けた家具設置（近隣施設のリニューアルに伴って出てきた廃材を活用）。
- ・興味があれば参加できる仕組みづくりも工夫（ワークショップなど）。
- ・コミュニケーションに伴うポイ捨て減の試み（STREET KIOSK）。常に誰かがいることでポイ捨ては減る、人が集まる、大切に使うようになるという流れを生み出している。インキュベーション的機能（小さく始めたい人を応援する仕組み）もある。
- ・周辺にはシェアキッチンが増えてきていて、そこで基礎体力をつけて出店していく流れがある。
- ・地元企業が参画するエリアプラットフォームと連携。
- ・多くの団体があるが、街の未来を描いで同じ目線で一緒に関わることが難しい。 → ゆるやかに繋がっている。
- ・ハード整備と街の課題を掛け合わせることを意識。
- ・今後は新しいライフスタイルの提案をしていきたい。
- ・実験的に動かしていく。0 から 1 を作る時には、行政が動くことが重要。
- ・消滅可能性都市に入ってから住み続けたい街をどう作るか力を入れて考え始めた。
- ・区画として大きな場所がないので、大規模開発という概念が当該エリアにはない。

（公共 R 不動産）

- ・有休化した公共不動産の利活用
- ・最初はメディア。情報のプラットフォーム化。活動をみた自治体から活用方法の相談を受けるようになった。
- ・行政が要項を作ると固くなる傾向があるので、民間からの提案ができる仕組みを作った（ドローンの練習場にしたい・・駅舎をホテルにしたい・・など）。
- ・民間がどんなことを考えているか、どんなことを大切にしているかに気づいてもらうきっかけ提供。
- ・民間と行政の間に入ってコーディネートする役割。
- ・公共不動産データベースを運営（津山市は好事例あり）。
- ・行政はどこにどう営業したら良いかわからない。



- ・公共発注のあり方も変わらなくてはならない（募集パートナー選び）。公共発注のボトルネックを指摘しているガイドブックを作成。
- ・「賑わい」は人によってイメージが違う。

Q. nest と豊島区との接点は？

A. 副区長が豊島会議に参加しながら町のニーズをヒアリング。そこから取り組みにつなげていった。

Q. 良い事例は？

A. 牛窓の町立病院。かつてのリゾート開発はすぐわないという思いを持った地元の人たちが管理。ただ打ち抜いただけ（屋根のある公園として）でオープン。津山の廃温水プールや廃幼稚園の活用なども参考事例。

【所感】

視察後、嬉しいニュースがあった。

「IKEBUKURO LIVING LOOP」がグッドデザイン賞 2024 ベスト 100&グッドフォーカス賞「地域社会デザイン」を受賞された。

三つ桜跡地や NTT 寮跡地の利用でヒントになるようなことをお聞きしたが、8年をかけて小さな社会実験や取り組みを行って、このような空間ができたことを伺い、簡単に賑わいの場づくりは難しいと感じた。

飯石さんのお話をお聞きし、やはり最後は人材だと感じた。

浜田市に人材がいなければ、飯石さんのような方に協力を仰ぎ、市民が必要とする公共の場を目指す方法もある。

今後の浜田市の計画にも注視し、市民に必要とされる場となるように調査・研究を続けていく。

2024. 10. 10 まちの保育園

- ・まちの間：離乳食試食、イベントなどに活用。
- ・クラスに 1-2 名多めに配置しているので不足してはいないが、採用も難しい。
- ・学びの日：1 日自由にやりたいことができる日。大人もこどもも主体性が大事。
- ・既製品玩具は少ない。
- ・責任分担性：保育とビジネス、ピアマネジメント。
- ・園庭開放日：定期的実施。地域の方も参加。
- ・おやこでたのしむかい。運動会などはない。
- ・卒園生がボランティアで関わる子も多い。



- ・卵アレルギーが増えてきているので、他の食材活用。食材調達はできるだけ近所で。
- ・道あそびは色々な方々の目が向くので効果的。
- ・おもしろい大人がいることを見せることが大事。

Q. 保護者とのコミュニケーションは？

A. 保護者のことをお客扱いしない。パートナーという感覚。理念に共感して入園希望するのは2割程度。

Q. 小学校へ上がったのギャップは？

A. 適応能力高い。

Q. 地域資源の活用を強く意識しているか？

A. 子どもができると生活圏が変わる。半径2キロをどう耕すか。

Q. 行政との連携は？

A. まちづくりセンターなどとは協力して、地域の公園づくりに今取り組んでいる。



【所感】

まず第一に子どもたちの笑顔、職員の笑顔、地域の方の笑顔が印象的だった。

まちの保育園にはコミュニティーコーディネーターという専任職員が子どもたちの興味・関心に寄り添いながら、地域、子ども、保護者、保育者の橋渡しをされていて、素晴らしい環境が構築されていた。

浜田市の保育行政ももっと地域を巻き込んだ仕組みを構築してもいいのではないか。

人口減少が進む中、今回学んだことを生かし、浜田市で育てて良かった、育てたいというような保育行政となるよう提言していく。